

保育者養成課程における 「幼児音楽」授業改善の一考察 —学生の音楽技術向上のために—

A Study of a Music Improvement Program in Child Care and Education Course

桐岡 亜由美^{*1}端山 梨奈^{*2}

Ayumi Kirioka

Rina Hayama

本研究では、2 年次に開講している「幼児音楽Ⅰ」「幼児音楽Ⅱ」について、特に「幼児音楽Ⅰ」の到達目標や授業の現状を検証するものである。その検証方法は、ファミリー向け演奏会でアンケートを実施し、その結果を基に授業の内容や進行のあり方を考察し、来年度の授業内容に活かすものである。来場者の保護者の意見から、保育者の音楽に対する技能、技術について高い期待を持っていることが判明した。しかし、現状の授業では、その期待に応えられていないのではという疑念を抱く。今後、音楽科目担当者と連携し、音楽科目全体から考察し、学生の音楽技能、技術を高め、深めていくことが重要である。

キーワード：幼児音楽、弾き歌い、リトミック

はじめに

2 年の養成期間の中で、音楽科目の総括的な位置づけである「幼児音楽Ⅰ」「幼児音楽Ⅱ」は 2 年次に開設している。特に「幼児音楽Ⅰ」は、器楽技術と声楽の総括的な授業と位置づけ、授業の内容の改善を図ってきた。2014 年度の音楽（器楽）Ⅰに導入したグレード制から円滑に移行し、どのような連携を図り、総括授業として充実した授業内容にするにはどうすればよいか、また、学生にとっていかに意欲的に取り組める内容にするのかを常に模索している。本稿では、その「幼児音楽Ⅰ」を中心とした授業改善の考察とする。

「幼児音楽Ⅰ」では、受講生のピアノ習熟度が一定ではなく、ピアノ演奏レベルは初心者から上級者までが履修している。その中で、総括授業としての到達目標を明確に設定することが大変難しく、授業形態もまた限られた条件の中で実施しなければならない。そのような状況を改善すべく、

ファミリーコンサートの来場者にアンケート調査を実施した。子の成長に多大な影響を持つ保育者に、保護者はどのような期待を持っているのかを音楽に焦点を絞り、答えてもらった。保護者の期待は、「幼児音楽Ⅰ」の到達目標とどの程度相違があるのかを検証する。検証の結果は来年度以降の授業に反映し、保育士、幼稚園教諭に必要な演奏技術の習得という到達目標の指標としたい。

1. 「幼児音楽」の授業内容

本学では、2 年次の音楽科目として前期の春学期に「幼児音楽Ⅰ」、後期の秋学期に「幼児音楽Ⅱ」を開講している。「幼児音楽Ⅰ」と「幼児音楽Ⅱ」の授業内容が大きく異なっている。

「幼児音楽Ⅰ」は、器楽技術の学びの総括と位置づけた授業内容となっている。その授業形態は、ピアノの習熟度別に大きく 2 つのグループに分け、授業時間を 45 分ずつの入れ替え制にし、ピアノと

*1：平安女学院大学短期大学部 保育科 助教

*2：平安女学院大学短期大学部 保育科 特任助教

声楽の両方の内容を学ぶ。ピアノ、声楽ともに授業内容は大きく前半と後半に分け、前半にコード・ネームによる伴奏法による弾き歌いの曲、後半では楽譜通りに弾く子どもの歌の弾き歌いと連弾に取り組んでいる。

声楽の内容は、アンサンブルを中心に、声を出すこと、また声を出すときに聴覚を使い、発する響きを聴きながら歌うことができるよう合唱に取り組んだ。

ピアノの授業をコード・ネームによる伴奏法を重点的に学修する理由は次の通りである。主要三和音のコード・ネームによる伴奏法を学修すれば、読譜が容易になり、そのため、演奏の完成度を高めようとする意欲が生じると考えられるからである。1 年次の「音楽（器楽）Ⅱ」で既にコード・ネームによる伴奏法を学んでいるが、2 年次に同じことを再度学修する。そうすることで、ハ長調、ヘ長調、ト長調の主要三和音をより正確に理解し、伴奏付けがより円滑にできる力を獲得すると考えているからだ。授業で取り上げている課題曲は、現場で演奏される可能性が高い曲を想定して選曲している。

「幼児音楽Ⅱ」は、リトミックを中心に、リズム遊び、リズムと表現などを組み合わせた授業である。リトミックの教育方法を用いた指導法、つまり、ピアノ演奏をしながら合図を出す方法、また、言葉をかけながら指導する方法を学修する。

リズム曲に合わせて身体を動かし、リズムを感じ取る力の定着、さらに、感じたリズムを身体表現できることを目標としている。

ちなみに、リトミックは、エミール・ジャック＝ダルクローズが創始した教育法である。本学の「幼児音楽Ⅱ」の授業では、特定非営利活動法人リトミック研究センターとの連携により、「幼稚園・保育園のためのリトミック」1 級指導資格が取得可能である。

2. 調査内容と結果

調査対象：コンサート来場者（保護者）

調査期日：1 回目

平成 28 年 6 月 12 日(日) 11:00 開演 11:40 終演、

14:00 開演 14:40 終演

「うたとがっきの！0 歳からの親子コンサート Vol.2」

出演 井上美奈子(トランペット) 端山梨奈(ソプラノ) 水口万智(打楽器) 山本悠香(ピアノ)

会場 旧大津公会堂 ホール月 12 日(日)

人数：87 名

調査期日：2 回目

平成 28 年 6 月 26 日(日) 11:00 開演 11:45 終演

第 49 回おひさま保育園「花鳥風月ファミリーコンサート 0 歳から聴けるコンサート」

出演(うた)高原いつか、松永京子、丸山晃子 (ピアノ)大原亜樹子

会場 デイサービスセンター花鳥風月

人数：29 名

合計人数：116 名

上記のファミリーコンサート来場者（保護者）を対象に、保育者の音楽的スキルに対する意識調査の 5 項目の設問と回答結果を表 1-5 に示す。

表 1 アンケート質問項目と回答結果 (1)

①子どもにどんなふうに音楽に触れてほしいですか。	人数
a. 家庭で過ごす時間の中でできるだけ多く	96
b. 保育園、幼稚園の毎日の保育でできるだけ多く	86
c. 保育園、幼稚園の発表会など特別な行事のときのみ	1
d. 特に触れてほしいとは思わない	0
e. その他	1

第 1 の質問について、ファミリーコンサート来場者であるということが大きく関係している可能性も否定できないが、来場者の実に 83% の 96 人が、家庭で過ごす時間の中で音楽に触れることが重要と考えている。また、保育園、幼稚園の毎日の保育で多くの時間に音楽に触れてほしいと期待している保護者が 74% の 86 人にのぼり、保育園、幼稚園でも音楽に積極的に触れてほしいという保護者の期待の高さが読み取れる。

第 2 の質問について、プロの演奏を聞かせることについては 43% の 50 人が望んでいた。完成度の高い音楽に対する期待が高い。毎日の保育で積極的に音楽を聞くことは 59% の 60 人であった。

受け身であっても聞くことに対して高い期待がある。積極的に歌うことについてはこの項目の中で最も高く、73%の 85 人であった。能動的な音楽との関わりについて非常に期待が高い。歌うこと以外の楽器演奏ができるようになることについても 39%の 45 人が選択しており、音楽の楽しさであるアンサンブルの経験を望んでいる。音感教育やリトミックについては半数を超える 52%の 60 人が選択しており、音感教育、リトミックについても高い関心がある。

表 2 アンケート質問項目と回答結果 (2)

②保育園、幼稚園などで保護者としてどのような音楽教育を求めますか	人数
a. プロの演奏を聞かせること	50
b. 毎日の保育で積極的に音楽を聞くこと	68
c. 毎日の保育で積極的に歌うこと	85
d. 楽器が演奏できること	45
e. 音感教育やリトミック	60
f. 特に求めない	1
g. その他	4

表 3 アンケート質問項目と回答結果 (3)

③子どもが保育園、幼稚園で歌う曲はどのような歌が良いと思いますか。	人数
a. 昔から歌われている子どもの歌	109
b. 最近創作されて、よく歌われている子どもの歌	57
c. テレビや映画などのアニメソング	26
d. J-POP などの流行歌	5
e. 特にない	1
f. その他	4

第 3 の質問について、昔から歌われている子どもの歌は、全質問項目で最も高い 93% の 109 人が選択した。回答の詳細をみると、1 つの回答を選択している回答者はおらず、昔から歌われている子どもの歌か、最近創作されて歌われている子どもの歌のどちらか、もしくは両者とも選択していた。つまり、いろいろなジャンルの歌を歌ってほしいという保護者の希望が読み取れる。

第 4 の質問について、自宅にピアノなどの楽器があったと回答した人は 64%の 74 名にのぼり、多くの家庭で楽器が身近にあったことがわかった。また 59%の 69 名は幼少期にピアノなどの楽器を習っている経験があった。幼少期の音楽経験は保育園、幼稚園での保育のみとの回答者は 16%の 18 人であった。また、特に触れる機会はなかったとの回答者は 10%の 12 人いた。

表 4 アンケート質問項目と回答結果 (4)

④あなたの幼少期における音楽経験について	人数
a. 自宅にピアノなど楽器があった	74
b. ピアノなどを習っていた	69
c. 自分の両親も音楽に関心があった	33
d. 保育園、幼稚園の保育でのみ	18
e. 積極的に音楽に触れる機会はなかった	12

表 5 アンケート質問項目と回答結果 (5)

⑤保育者養成機関の音楽教育に対するご意見、ご要望がありましたら、是非お聞かせください。
<p>・子どもが好きな曲をたくさん覚えてほしい、とおる声で上手なピアノで子ども達に聴かせてほしい</p> <p>・ピアノのスキルをあげて欲しいです。学生自身もいい音楽をたくさん聴いて、引き出しを増やしてほしい。</p> <p>・いろんなジャンルの音楽を使って教育してほしい。</p> <p>・子ども達への音楽教育にしっかり携わることができる人材の育成を望みます。</p> <p>・童謡もよいものがたくさんあります。日本語のもつよい響きを若い人たちに伝えてほしいです。わらべうたもぜひ指導してください。</p> <p>・子ども（小1、6歳）に意見を聞いたところ遊びの中で音楽を取り入れてもらうのがうれしいとの事です。</p> <p>・音楽は子の力になると思います。</p>

第 5 の質問は保育養成機関への要望を自由に記述してもらった。

3. 授業の現状とその問題点の考察

調査の結果から、家庭内だけではなく、保育園、幼稚園の保育でもできるだけ音楽に触れてほしい

と考え、保育者の演奏技能に対して期待している保護者が多いことがわかった。それは、保育者に高い音楽技術が求められていることを意味する。そのため、幼児音楽の授業では、器楽演奏の総括授業として求められる曲の演奏できる技術の獲得、特に多くの弾き歌いの曲が弾ける演奏技術が必要である。なぜなら半年後には実際に現場で保育者として立つからである。考察を進めていくと大きく 4 つの問題点があることがわかった。その 4 つの問題点はそれぞれが独立した問題ではなく、複合的な問題であることが判明した。

第 1 に授業で取り組んだ曲数の問題である。全履修者 68 人のコード・ネームによる伴奏法の授業で取り組んだ曲数を表 6 に示す。

表 6 前半の授業で取り組んだ曲数

前半の授業 取り組んだ調性と内容	曲数	人数
ハ長調 の 2 曲	2	8
ヘ長調の 1 曲目まで	3	11
ヘ長調の 2 曲	4	4
ト長調の 2 曲	6	29
ト長調までの 6 曲に加え、移調奏	6	11
全課題曲 8 曲と移調奏	8	5

上述のように、前半の授業では、コード・ネームの伴奏法の学修であるが、ちょうど 2 週間の幼稚園教育実習実施直前ということもあり、表 7 のように課題曲を選んだ。

表 7 前半の授業で取り組んだ課題曲

調性	曲数
ハ長調	「おはよう」「おべんとう」 「おかえりのうた」「さようなら」
ヘ長調	「なぞなぞのうた」「大きなたいこ」または 「1 年生になったら」「どんな色がすき」
ト長調	「レッド・リヴァー・ヴァレー」と 「ふしぎなポケット」、または「ちいさな世界」
ニ長調	「こぎつね」
変ロ長調	「きらきら星」

どの曲が終了し、次回はどの曲を練習してくれ

ばよいかが明確にわかるよう、曲名の記載されたチェックシートも配布し、取り組む曲の順番と次の回の課題についても提示し、自主的に練習を推進していけるように配慮した。しかし、1 年次の音楽（器楽）Ⅰと音楽（器楽）Ⅱのピアノのグレードの到達度によって取り組む曲数に大きな差が生じ、ハ長調の課題すべてが終わらない学生もいた。これでは、保育者として、現場に立ったときに演奏できる曲目が少なく、苦勞するのではないだろうか。ピアノグレードの到達度が高い学生は、多くの曲に取り組むことができたが、リズムの間違いがあることも多く、主和音から転回形を選択し、各調の主要三和音の理解が不十分な学生もいた。正確なコード・ネームによる伴奏法の獲得が十分ではないということが判明した。コード・ネームによる伴奏法は 1 年次の音楽（器楽）Ⅱですでに学修し、今回はその復習を兼ねていたが、その理解と習得が十分ではなかったと言える。

【譜例 1】 おべんとう STEP1



前半の課題として提示したハ長調、ヘ長調、ト長調の曲を全て終了した学生は、僅か 5 人であった。その大きな要因は、選曲した大半の曲に譜例 1 で示したようなリズムの曲が多かったことが挙げられる。特にピアノ初心者にとってこの付点 8 分音符のリズムと 16 分音符の組み合わせのリズム、いわゆるタッカのリズム、スキップの動きに用いられるリズムが含まれると演奏に困難が生じ、譜例 2 のようにすべて 8 分音符で演奏していた。

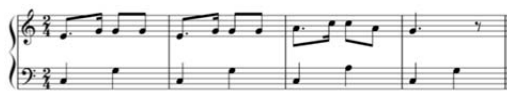
【譜例 2】 右手リズムに困難が生じ誤ったリズムの演奏例



なおかつ、左手が譜例 3 のような場合、右手と左手の協働に困難が伴い、リズムが譜例 4 のようになってしまう学生が多く見受けられた。正確なリズム演奏を体得することに多くの時間が必要であ

り、その結果、取り組む曲数が少なくなりました。また、この付点 8 分音符と 16 分音符の組み合わせのリズムに同じ音が連続して続くとともに困難が増し、拍がわからなくなる学生が多く見受けられた。このようなピアノ演奏に加えて、子どもの弾き歌いであるから、歌唱を同時進行で行わねばならない。そう考えると弾き歌いは非常に困難がともなう演奏技術であり、確かな演奏技術の獲得に時間を要する。

【譜例 3】 おべんとう STEP2



【譜例 4】 右手リズムに困難が生じ誤ったリズムの演奏例



このリズムに関する演奏技術の問題が、上述のように明らかになった。これは演奏技術の問題とともに読譜力も大きく関わっている。今回は、まず主に右手のみ、または、左手のみの片手練習をする時に階名で歌ってから両手演奏に移行するという指導を取り入れた。その指導により、かなりの学生に改善が見られた。歌唱しながら練習すると、自分が演奏している音と正確なリズムとの相違に気づくことができる。その上、歌唱しながら演奏することに慣れることができるため、非常に重要な練習である。このような練習を取り入れても、ある程度弾けるようになるまで、時間を要することが判明したので、1 年次の「音楽（器楽）Ⅰ」「音楽（器楽）Ⅱ」の授業と連携して、このリズムの対策を講じていく必要がある。

中間演奏発表後の後半の授業では、課題曲として「南の島のハメハメハ大王」「おばけなんてないさ」「アイスクリームの歌」「おはながわらった」を選曲した。また弾き歌いの学修と並行してピアノ連弾にも取り組んだ。難易度も様々なディズニーやスタジオジブリで使用されたアニメソングやポピュラー音楽の楽曲などを準備した。弾き歌い

については、コード・ネームの伴奏法による弾き歌いの学修時と同様に、チェックシートを配布し、自主的な学修を促すよう配慮した。全履修生の後半に取り組んだ弾き歌いの曲数を表 8 に示す。

表 8 後半の授業で取り組んだ曲数

後半の授業 課題曲	終了した人数
1 曲目 南の島のハメハメハ大王	68
2 曲目 おばけなんてないさ	34
3 曲目 アイスクリームの歌	4
4 曲目 おはながわらった	3

課題曲として 4 曲しか選曲しなかったが、もっと多くの課題曲を提示すべきではないかと考えていた。しかし、当初の予想とは大きく異なり、大半の学生は、最高でも 2 曲しか取り組めなかった。なぜ、このような結果になってしまったのであろうか。コード・ネームによる伴奏法ではなく、楽譜通りに譜読みをしなければならないことに困難が生じたためであろう。この課題曲の取り組みが少なかった原因を 2 つ挙げることができる。

第 1 原因として、2 曲目の課題曲「おばけなんてないさ」が、先に述べたように付点 8 分音符と 16 分音符の組み合わせのリズムが多用されている曲であるためだ。また同じ音も連続して続くため、完成度の高い演奏をすることが難しいようであった。学生の感想でも「リズムが難しく、どうしても仕上げるができなかった」という記述が見られた。ここでもやはり、譜読みの問題があることがわかった。

第 2 原因として、連弾の楽曲についても、譜読みに時間を要していたためだ。連弾では、第 1 ピアノにオクターブ記号や加線の音符が多く、第 2 ピアノは両手ともにへ音記号で書かれている。また、とりわけリズムは多種多様な音価の組み合わせのリズムが使用されており、その譜読みに非常に苦労したためだ。

しかし、このような困難があっても、空き時間を見つけて、ピアノ練習に時間を割く学生が出てきた。これは弾き歌いの課題のみの授業内容では見られなかった姿であった。連弾の取り組みは、

一人の演奏では味わえないより豊かな音楽と感じられたこと、二人での演奏が、息も合い満足したものになったときの達成感を得る学生が多かったと考えられる。授業の終了時間をむかえても、ピアノに熱心に向かう学生が見受けられた。

後半の弾き歌いの演奏発表では、取り組んだ曲数は少ないが、連弾の練習を積極的にまた精神的に重ねた学生は演奏技術が上達していた。前半の課題曲に比べ、若干小節数も多い曲であるにもかかわらず、曲の途中で演奏を中断することや間違った音を弾いてしまい、その部分から演奏を継続できない学生が激減していた。

この演奏技術の上達は、ピアノの演奏技術のレベルが中級や上級の学生だけではなく、初級の学生でもみられた。ピアノ演奏技術の上達は、楽曲に多く取り組むことで得られると考えていたが、若干難易度の高い楽曲に取り組む方が、結果的に多くの練習を重ねることになり、より大きい成果が得られるということを確認することができた。

しかし、連弾の取り組みについては、譜読みに時間を要するため、2 年次の器楽演奏技術の総括的な位置づけである「幼児音楽 I」で取り組むべきか、「音楽（器楽）I」「音楽（器楽）II」で取り組むべきか等再考の必要がある。

第 2 の問題として、声楽の問題が上げられる。アンケートの音楽教育については、積極的に歌うことに対して最も多くの保護者が期待していることがわかった。弾き歌いの課題曲に取り組み、中間演奏発表と期末演奏発表として 2 回の演奏発表をホールで実施している。広い教室でグランドピアノを使用する演奏発表のため、多少はピアノの音量が大きくなってしまふことがある。しかし、弾き歌いの歌唱については声量がなく、歌詞が聞こえない、あるいは、歌っている声さえ聞こえないという学生が多くいた。特に、中間演奏発表ではそれが顕著であった。

現状の声楽の授業では、まずは歌うときの姿勢、その姿勢を維持するため体操などを取り入れ、発声練習をおこなっている。リズム感を養うためにボディパーカッションを取り入れた学修をした。ピアノの学修内容と連携を取り、譜例 5-8 のように、主要三和音のハーモニーを作り、「きらきら星」

や「さんぽ」の旋律とともに 4 声のアカペラ合唱を完成させた。

【譜例 5】 ソプラノ声部



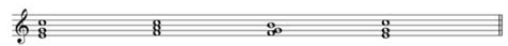
【譜例 6】 メゾソプラノ声部



【譜例 7】 アルト声部



【譜例 8】 全声部



この 4 声の合唱については、和音の機能の学修という点で旋律の伴奏付けに対する理解への大きな助けとなり、重要な学びであると考えている。なぜなら、ピアノで弾き歌いをする、弾くという行為と歌唱を同時に行う技術的な問題に集中してしまい、自分の演奏や主要三和音の持つ響きを客観的に聴くことを怠る。4 声の合唱は、歌いやすい音域を考慮して主和音は第 1 転回形、また属七の和音は第 2 転回形としているので、合唱で和音の持つ機能について聴くという力をより強く育むと考えている。

この声楽の学修では立った姿勢を基本にした発声練習である。弾き歌いの発声は、基本的に椅子に座った状態での発声になるため、ピアノを弾きながら、どのような姿勢で発声すればいいかという指導が必要であるということが判明した。

第 3 の問題として、和音の機能の理解の到達度があげられる。ピアノの伴奏付けで譜例 9 のような和音の転回形を選択して演奏する学生がいた。特にへ長調の伴奏付けに取り組むと多くの学生が、譜例 9 の「大きなたいこ」を演奏時、主和音の F に転回形の和音を選択していた。また、へ長調の V 度の C はへ長調では主和音であるゆえに、へ長調でも基本形を選択する学生が多くいた。さらに譜例 9 第 6 小節には IV 度の Bb の和音を選択しなければならないが、Gm の和音を選択する学生も多く見受けられた。この伴奏付けは間違いでは

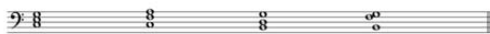
ない。しかし、意図せず、ヘ長調の主要三和音ではない Gm を選択したのであった。

【譜例 9】「大きなたいこ」コード伴奏付け例



さらに、Gm の構成音である第 3 音の B flat 音を B 音で弾いていた。このことから、ハ長調以外の調性の伴奏付けになると和音の機能の理解が定着していないことが判明した。この定着度の低さの原因として、譜例 10 のように、ハ長調の曲での伴奏付けに慣れてしまい、ハ長調以外の伴奏付けに対応できていないこと、またハ長調と共通の和音がハ長調以外では機能が異なっていることの理解が十分でないことが考えられる。

【譜例 10】ハ長調 転回形を含む主要三和音



このような演奏は、コード・ネームによる伴奏付けの曖昧な理解が、ハ長調とヘ長調の混乱した伴奏付けにつながっていると考えられる。また、このような伴奏付けの理解では、ハ長調以外の調性の曲に取り組むことが困難と感じてしまい、自主学修の意欲をそぐものになってしまう可能性が考えられる。

この問題の対策としては、移調奏が効果的であった。ハ長調以外の調では、ハ長調に移調して演奏する、またその逆に、ハ長調で取り組んだ曲をヘ長調、ト長調に移調して演奏することによって、和音の機能について理解が得られた。移調奏に初めて取り組む学生が多く、当初は困難に感じる学生も少なくなかったが、運指も同じになるということに自分自身で気づくことも見られ、理解が進んでいる様子が見られた。このように移調奏によって和音の機能の理解が得られたが、移調奏に取り組めた学生は 16 名であった。移調奏には全員が取り組めるよう、各調のカデンツを練習に取り入れるといった工夫が必要である。

さらに、声楽の授業とも連携を深め、ハ長調だ

けではなく、ヘ長調、ト長調についても 4 声の合唱に取り組むなど改善が必要である。

1 年次の「音楽（器楽）Ⅰ」「音楽（器楽）Ⅱ」で使用している本学独自のグレード制の少なくともグレード 2 を修了していないとハ長調以外の調性の音階や曲に取り組むことができない。1 年次の「音楽（器楽）Ⅰ」「音楽（器楽）Ⅱ」のグレード到達目標をしっかりと定めること、少なくともグレード 2 までは必ず修了していることを目標にしておくことが重要である。グレードの到達度によってはハ長調以外の調性に初めて取り組む学生がいるということを想定し、授業の工夫をしていくことが必要である。

第 4 の問題として、アンケートの結果で明らかになったピアノと声楽以外に関することである。音感教育やリトミックに対する保護者の期待は、「幼児音楽Ⅱ」で応えることができるが、鍵盤楽器以外の楽器演奏ができることについても保護者の高い期待がある。

本学の音楽科目ではピアノと声楽を中心に置いての演奏技術を学修している。「幼児音楽Ⅰ」の後半では、声楽の授業内で、「風になりたい」、ディズニーメドレーより「ホールニューワールド〜ビディバビティブー」、サウンドオブミュージックメドレーより「サウンドオブミュージック〜私のお気に入り」、「ヘイルホーリークイーン」の合唱に取り組んだ。期末演奏発表では、これらの楽曲にピアノ以外の器楽を取り入れた。主に打楽器であったが、その打楽器の演奏も一部の学生のみが担当する結果となった。他の学生についても、打楽器に触れる機会を増やす必要がある。

ピアノ以外の器楽の演奏法の学修については、「幼児音楽」だけではなく、音楽科目全体でどの授業で取り組むか、またどのように学修していくかということを検討しなければならない。

なお、課題曲のチェックシートは図 1、図 2 で示す。

4. 今後の改善点

「幼児音楽Ⅰ」で 4 つの大きな問題が明らかになった。

第 1 の問題は、15 回という限られた授業回数の中で大きな成果を上げることが難しいのが現状である。しかし、拍手を用いたリズム打ち、二人組になって手合わせでのリズム打ちなど、ピアノを一旦離れ、リズムを理解し、ピアノ演奏に移行するといった工夫も必要であろう。声楽の内容で、ボディパーカッションを取り入れたリズム学修を実施していることから、声楽との連携をとり、付点のリズムに特化した授業内容も取り入れていくべきであろう。

第 2 の問題は、15 回すべての授業をピアノと声楽という単純に二分化して実施せず、弾き歌いの演奏を声楽からの観点を持って指導していくという授業内容に変更していくことが必要である。ピアノで弾き歌いをすると、弾くという行為と歌唱を同時に行うが、どうしてもピアノ演奏に集中してしまい、歌唱がおざなりになりがちである。歌唱指導時には、正確かつ明確に発音することを優先しなければならない。ピアノの演奏に気を取られ、歌唱に対して意識が疎かにならない弾き歌い演奏技術を目指し、その技術の定着を図ることが重要である。

第 3 の問題は、和音の機能をハ長調以外の調性でも理解し習得するために、授業内で必ずハ長調、ヘ長調、ト長調のカデンツァに取り組むなど、ハ長調以外の調性を演奏する機会を増やすことが重要である。この機会を増やすということには、やはり声楽の授業とも連携を深めることが含まれる。声楽の 4 声のハーモニーを作る時に、ハ長調以外の調性にも取り組むことも重要である。さらに 1 年次の「音楽（器楽）Ⅰ」「音楽（器楽）Ⅱ」とも連携を取り、対策を講じる必要がある。

「音楽（器楽）Ⅱ」のコード・ネームによる伴奏法に取り組む時には、2 年次の「幼児音楽Ⅰ」の授業内容の基礎となることから、和音の原形、転回形について確実に理解を得るようにしなければならない。そのために「音楽理論」との授業の連携も考えてかなければならない。

第 4 の問題は、「器楽」と科目名がつく授業は鍵盤楽器を中心においた演奏技術を獲得すること

を目標に置いている。現在、鍵盤楽器以外の楽器については、音楽科目全体として、演奏技術に関連する授業がなく、その点について問題である。特に打楽器の鈴やカスタネット、タンブリン、トライアングルなど、持ち方、叩き方の基本的なことから取り組む必要があるということがわかった。

「領域」の「表現」から「教科」の「音楽」をつなぐ、保幼小連携など新たな試みとして、鍵盤ハーモニカを取り入れる保育園、幼稚園もある。この指導も保育者が担っていかなければならない。鍵盤楽器以外の器楽の演奏技術の習得について重要な課題だと言える。音楽科目全体で授業内容の精査を重ね、来年度には鍵盤楽器以外の楽器についても取り入れる内容に変更する必要性を強く感じている。

おわりに

「幼児音楽」の授業内容改善について、アンケートを基に問題点を考察した。アンケートを実施しその結果から、保育者養成校である本学の授業のもつ意義とその責任を改めて実感した。また「幼児音楽」の授業において明らかになった問題点は、この授業内の改善にとどまるのではなく、音楽科目全体の問題として捉えることが非常に重要であることを認識した。

2 年という養成期間は決して長くはない。そのため、この養成期間において音楽科目全体における連携が強く求められる。音楽科目の連携を深めることと、さらには、問題に対して柔軟に対応できる連携ということも重要である。この音楽科目の連携、その先には他の教科との連携を見据え、授業内容の改善を進めていくことが、豊かな感受性をもつ保育者を養成する大きな助けとなるであろう。

本研究で明らかとなった問題点と改善点について、来年度の「幼児音楽Ⅰ」の授業内容を改善に活かし、今後は音楽科目全体の連携についても検討していきたい。

コード伴奏 チェックシート

2016年度 幼児音楽 I

名前 ()

取得グレード ()

プリント名	コードの種類	コード名	曲目	チェック欄
STEP 2	ハ長調の3コード	C,F,G(7)	ブ) 例第 おはよう	月 日
			教) おべんとう	月 日
			教) おかえりのうた	月 日
			教) さようなら グループ②	月 日
STEP 4	ヘ長調の3コード	F,B \flat ,C(7)	ブ) 例題 なぞなぞ グループ①	月 日
			ブ) 例題 1年生になったら グループ②	月 日
			教) 大きなたいこ グループ①	月 日
			教) どんな色が好き グループ②	月 日
STEP 6	ト長調の3コード	G,C,D(7)	ブ) レッド・リヴァー・ヴァレー	月 日
			教) ふしぎなポケット グループ①	月 日
			教) ちいさな世界 グループ②	月 日
STEP 7	ニ長調・変ロ長調の3コード	D,G,A(7) B \flat ,E \flat ,F(7)	ブ) 子ぎつね	月 日
			ブ) 豆まき	月 日
			ブ) きよしこの夜	月 日
			ブ) はしるのだいすき	月 日
その他	短調の3コード			月 日

4/1-6/3	前半 ピアノ 3205～3207教室	前半 歌 3325教室
	グループ②	グループ①
6/10-7/29	前半 ピアノ 3205～3207教室	前半 歌 3325教室
	グループ①	グループ②

図 1 前半授業の課題曲チェックシート